

学園紛争は、深省を發すべき多くの問題を提起したが、私にはまだ十分にその意味を把握できない状態のままに残っている。それが偽りのない現実である。事件の経過についての事実認識には一応の共通の認識があったとしても、その評価は全く対立したまま推移した。この評価は事実認識と相互媒介的に深まることによつて評価自体が一致の方向に向うべきだと思ふし、それが主観性を脱する唯一の方途だと確信していたが、それが不可能だと言うことを知ったことの驚ろきは、今も新鮮だ。おそらく消えることはあるまい。

大学の存在様式や教育の制度的側面も問われた。それらの問題の一環としてこの「論究日本文学」刊行の意味も問われた。そして数年にわたる休刊があった。その間

における日本文学内部における討議——教員と学生、学生と卒業生、卒業生と教員の間での討議、この本質的部分では必ずしも一致しなかった。この不一致の部分が存在したと言ふことが、実はかえつて重要であつた。むしろ日本文学会の存在理由であり、「論究日本文

新しき出発に向けて

国 崎 望 久 太 郎

学」刊行継続の使命である。学問の方法や目的を不断に問い続けることが、そして相互批判の場を確保し相互に研究の自由を保障することのために、学会があり、雑誌が刊行されねばならない。それが個々の研究者の本質的な問いにかかわると言ふことであろう。

不一致を確認し、不一致を一致へ、一致をさらに高次の一致へ、と發展させることがわれわれの使命である。学問の道に停滞はありえないし、断えざる問いの前に立つ覚悟が必要である。ただ疑ふことの方法的意味は、ただいたずらに疑ふことにあるのではない。真理を追及する方法としての

み理由がある。それがデカルトの方法序説の教えであつた。

われわれの学会が学問的真理追求を本質課題とするかぎり、現在の不一致は当然である

と覚悟し、新しい学問的真理の追及のための諸課題へ向つての静かな前進を始めねばならない。

* * *

* * *

* * *